〈本郷キャンパス〉
学校法人文京学園
文京学院大学経営学部・外国語学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学生涯学習センター
〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1
☎大 03-3814-1661 生涯 03-5684-4816
文京学院大学文京幼稚園
〒113-0023東京都文京区向丘 2-4-1
☎幼 03-3813-3771

〈ふじみ野キャンパス〉
文京学院大学人間学部・保健医療技術学部／大学院／文京学院大学ふじみ野幼稚園
〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196
☎大 049-261-6488 幼 049-262-3806

〈駒込キャンパス〉
文京学院大学女子高等学校／文京学院大学女子中学校
〒113-8667 文京区本駒込 6-18-3
☎03-3946-5301

文京学院

平成 27 年(2015 年)
8 月 31 日
第 712 号
発行
学校法人文京学園
http://bgu.ac.jp

中高 中高部活動 夏の活躍

高校バレーボール部 祝 インターハイ準優勝！

この夏、高校バレーボール部はインターハイで準優勝、中学バレーボール部と高校カラーガード部は、それぞれ全国大会で輝かしい成績を残しました。

7月28日から8月1日、舞洲アリーナ（大阪市）を中心に「平成27年度全国高等学校総合体育大会」（インターハイ2015）が行われ、高校バレーボール部が予選グループ戦、準決勝トーナメントを勝ち上がり、快進撃を続けて決勝戦へ！ 対戦相手は、03年の長崎インターハイ決勝戦で惜敗した因縁の九州文化学園（長崎）。北川茉奈主将（3楓）を中心に、長内美和子選手（同）、富澤結花選手（同）の活躍で第一セットを先制しましたが、相手も全国優勝3回を誇る名門。徐々に反撃され、第二・第三・第四セットと先方の勢いを止めることができないまま、1対3で惜敗。優勝は逃したものの、12年ぶりの準優勝は見事な結果でした。なお、優秀選手として長内・富澤選手、リベロ優秀選手として高津友香選手（同）が選ばれました。

吉田岳史監督の話「選手たちは本当に頑張りました！ ただただ、ありがとうという気持ちでいっぱいです。現在は既に春高へ向けての練習に入っていますので、引き続き応援をよろしくお願いいたします」

北川主将の話「インターハイという大きな舞台に立つのが初めてのメンバーが多く、緊張はあったと思いますが、九州文化学園の勢いのほうが私たちよりも上でした。準優勝という素晴らしい経験をしましたが、自分たちのプレイを出し切れなかったことが悔しい！ 敗因をしっかり分析し、それをプラスに変えて、まずは次の春高東京都予選に繋げます！」

富澤選手の話「決勝戦で、チームも応援団もひとつになれたことをとてもうれしく思いました。多くの方々のお陰でここまできたことを感謝しています。次の目標である春高に向けて色々プレッシャーはありますが、それを跳ね除ける力と思いをチーム全体で分かち合って、文京バレーの神髄を発揮したいと思います。」

長内選手の話「決勝戦で、序盤は私たちがリードしていても、最後にセットを取られてしまうのは、私たちが出すミスが原因。これからは一試合ごとが最後の勝負。インターハイで準優勝したプライドと、3年生の意地を持ち、ミスを出さない練習を重ねて春高に臨みます！」

決勝トーナメントでの熱戦

決勝戦は迫熱の戦い

準優勝を勝ち取ったメンバー（前列左から北川さん、富澤さん、長内さん／左下と同写真提供＝バレー部保護者・佐藤正明さん）

祝 全国大会優勝！ 中高カラーガード部

7月30日から8月1日、「全国高等学校ダンスドリル選手権大会2015」が東京体育館で開催され、高校カラーガード部がトールフラッグ部門で2年連続の「優勝」を勝ち取りました。

なお、8月30日に東京体育館で行われた「JAPAN CUP マーチングバンド・バトントワリング全国大会」では、中高カラーガード部29名（中学生14名・高校生15名）が、共通カラーガード部門において「第2位」となりました。

長嶋優果部長（高2楓）の話「全国大会への出場が決定した直後から、1位を取ることが目標でした。チームで沢山練習した結果、2年連続優勝を達成できて本当にうれしい！ プレッシャーから開放されて安心し、自信に繋がりました。何よりずっと支えてくれた後輩、コーチ、顧問の先生、先輩、家族、メンバーに感謝の気持ちでいっぱいです！」

吉田美波副部長（同）の話「この大会で、仲間と団結することの大切さを改めて実感しました。このメンバーで優勝することができて、心からうれしく幸せに思います。大会では、他団体の演技を見て学ぶことも多くあり、とても良い経験となりました。高2として至らない点が沢山ありますが、これからも精いっぱい頑張り、みんなが『カラーガード部に入って良かった！』と思えるようなチームを作りあげていきたいと思います」

「全国高等学校ダンスドリル選手権大会2015」で優勝したメンバー（前列左から2人目・吉田さん、3人目・長嶋さん、右端・成田顧問）

祝 全国大会ベスト8！ 中学バレーボール部

8月21日から24日、旭川大雪アリーナ（旭川市）を中心に「第45回全日本中学校バレーボール選手権大会」が開催され、本校中学バレーボール部が「ベスト8」に入りました。

22日のグループ戦（旭川市総合体育館）では、本校は近江兄弟社中学校（滋賀）を2対0で破り、23日の決勝トーナメント戦（同）へ。一回戦では、仙台市立蒲町中学校（宮城）に2対0、二回戦では、つがる市立稲垣中学校（青森）に2対1で勝利しました。続く準々決勝は、八王子実践中学校との東京対決となり、第1セットは惜しくも3ポイント差で先方に取られ、第2セットも反撃しましたが、2対0で惜敗しました。

試合ごとに成長した選手たちの活躍に、はるばる旭川へ駆けつけた応援団から大きな拍手が送られました。なお、同大会で中山音佳選手（3菊）が優秀選手に選ばれました。

金子真奈美主将（3菊）の話「自分がプレイをしてチームを引っ張っていく立場ですが、都大会で怪我をしてしまい、関東大会・全国大会では、みんなと一緒にプレイすることができませんでした。でも、コートの外に出て初めて客観的に試合を観ることができたので、コートの中の選手にとって何が必要かをいつも考えて行動するように心がけました。メンバーが揃っていない中で、みんなが全力で一つひとつ努力を重ねて、良い結果を出してくれたことを、本当にありがたいと思います」

天野嘉之監督の話「大会では、東北第一代表の稲垣中学校との対戦が第一関門でした。それを突破して準々決勝に進出しましたが、力及ばず敗れてしまいました。中山選手と井上麗奈選手（3桃）の両エースを中心に、全員で粘りのバレーボールを展開しました。春の東京都大会では、エースである金子主将がチームをよくまとめ、その頑張りにみんなが触発されて優勝できましたが、関東・全国大会ではみんなが『金子主将の分まで！』という強い思いで試合に臨んでくれました。チームの中心となる3年生、それをサポートする1、2年生全員の努力の結果だと思います。今年も沢山の応援に支えられ、選手共々貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました」

井上選手渾身のアタック（写真提供＝バレー部保護者・伊藤由美子さん）

ベスト8を勝ち取った本校チーム（前列左から2人目・金子さん／写真提供＝バレー部保護者・下実穂さん）

Green Spirits 新しい価値の創造が変化を生む

本郷キャンパスディレクター 森岡 俊也

本郷キャンパスディレクターを拝命して8カ月が経ちました。

これまでも感じておりましたが、ディレクターとして本郷キャンパスをみると、実に活気に満ち溢れたキャンパスだなということを改めて実感しております。

学生はキャンパス内でパソコンを囲んでプレゼン資料を作成したり、最近できたラーニングコモンズでホワイトボードを使いながら議論したり、時には中庭のバスケットゴールや体育館で汗を流したり思い思い活発に活動をしています。課外活動も施設を取り合う勢いで、これまた活発な活躍をしています。

この活気の源泉は何でしょうか。それは、「変化」ではないかと思います。何かを求める気持ちとそれに応える気持ちが合わさったときに、新しい価値が創造され躍動が生まれます。

よく言われることですが、世の中がアナログ時代からデジタル時代になって変化のスピードは刻一刻とアップしています。デジタル化によるICTの発展は、人間生活を変えて便利にしていきます。この変化のスピードが衰えることはなくその流れを利用していかなくてはならないのが時代の流れだと思います。

大学について考えたときに、我々は時代の変化についていくのではなく、変化の先を走らなければいけないのではないかと思っています。大学を卒業して社会で活躍する学生は将来の世の中をリードしていく原動力だからです。

本郷キャンパスはここ数年で大きく変わりました。施設面でみれば、直近では東本館、新S館が誕生し学習の環境が大きく変化しました。学生寮のドーム西片もリニューアルされて学生生活の基盤も刷新されています。教育面においても、看護学科が新設され、経営学部の学科名称変更も予定されています。

これからの本郷キャンパスの運営として、世の中の変化を先取りしたキャンパスの改革を推進して、学生の求めに応える、そして躍動感のある本郷キャンパスにしてまいりたいと思います。どうぞご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

特集1　2016年春「経営学部」が変わる！

永年、経営学部経営学科として親しまれてきた学科名が、来春より「経営コミュニケーション学科」に名称変更され、経営学部はさらにパワーアップします！

「ビジュアル・シンキング」プログラムを新設

来春より経営学部では、「ビジュアル・シンキング」を正式カリキュラム化（選択必修科目）し、より専門性を高めたい学生向けにインフォグラフィック制作」（情報やデータを視覚的に表現）を実施します。

グローバル時代のマネジメント・コミュニケーションでは、効果的な情報共有や素早い意思疎通が、文化を異にする多様な場で求められてきます。そうしたニーズを踏まえ、『見える化』する力」を高めるための「ビジュアル・シンキング」のプログラムを取り入れます。これは、「概念やデータを、（共同作業を通じて）『絵にする』ことで共有し、お互いの理解、共感を深める」ことを目的とした手法です。骨格となるマネジメントやマーケティング・デザインの専門知識の上に、これからのマネジメント・コミュニケーションに有効なスキルを身につけさせることで、ビジネスの現場において、先駆的な存在になりうる優れた人材を育てていくことをめざしています。

「見える化」する力とは

これからのビジネスに必要な『見える化』する力の一例を紹介します。ビジネスにおける多彩な領域で必要な力を「見える化」＝絵で表現すると、以下のようになります。

「マネジメント専攻」と「マーケティング・デザイン専攻」へ

現在、経営学部経営学科には「経営コミュニケーション専攻」と「コンテンツ・マーケティング専攻」の2つの専攻がありますが、学科名称変更に伴い、これらも「マネジメント専攻」と「マーケティング・デザイン専攻」に改めます。

「マネジメント専攻」では、経営学や会計学などの専門性の高い科目を知識の柱として学ぶ一方、広く実社会とのコミュニケーション機会を取り入れたカリキュラムで、現場の目線で人や組織をマネジメントできる実践的な専門知識の獲得が基本的目標になります。「マーケティング・デザイン専攻」は、マーケティング・ブランド、デザイン、コンテンツ等の専門科目を学びながら、販売の最前線や、コンテンツビジネスの見本市、映像・舞台等の現場で生きた体験を積ませ、創造性が求められる現場で中心となって活躍できる人材を育成していきます。

大学　埼玉県中山間「ふるさと支援隊」に初採択
人間学部生が「マゴコロ宅急便プロジェクト」を開始

人間学部コミュニケーション社会学科の学生たちが中心となり、埼玉県の中山間ふるさと事業調査研究業務（中山間「ふるさと支援隊」）に、「学生と地域住民双方おもてなしで支えるふるさとづくり～マゴコロ宅急便プロジェクトの企画・開発～」をテーマとした企画を提案し、本学として初めて採択されました。指導教員は、同学科の中山智晴学科長・教授と古市太郎助教。

「ふるさと支援隊」は、大学生の持つ行動力、専門技術・知識、新しい視点などにより、集落の活性化に取り組む活動で、埼玉県が2010年から実施している事業です。活動対象は、人口約150名、世帯数約40戸、平均年齢70歳弱の中山間地域、埼玉県越生町龍ヶ谷。豊富な自然資源や地域住民の心の交流・支え合いによる昔ながらの生活スタイルが存在していますが、地域住民だけでは生活・自然環境、伝統文化の保全・継承など「ふるさと」の維持が困難となりつつあります。

同プロジェクトは、都市部から訪問する大学生を中心とする若者の交流人口の増加を促進することで、地域住民との心の触れ合い、協働の場を設け、双方が学び合うことでお互いの生きがいを作り出していく「真心」の交流による「ふるさと」支援です。

同プロジェクトには、代表の伊藤慎之助さん（同学科3年）、中潟亮平さん（同3年）、小林智也さん（同3年）、金子こずえさん（同3年）、田島廣哉さん（同2年）が参加。その他、中山ゼミ生10名が協力しています。伊藤さんによると、初の活動は、6月28日に龍ヶ谷集会所で開かれたミーティング。8月1・2日には、草刈り（河川清掃）を実施し、バーベキュー大会、越生梅フェアへ参加しました。

交流中に伊藤さんが知った課題のひとつは、交流人口の獲得。越生は都心に近く、サイクリングやツーリング、ハイキングなどに来る人もあります。実際に、伊藤さんがサイクリングに来たんと話したところ、「越生の急な坂は上りがいがあり、自然が豊かで走っていて気持ちがいい」と好評でした。このことから、伊藤さんは「交流人口の獲得は可能性がある」と感じています。ただ、問題のある課題も見えてきました。龍ヶ谷地区は村興しに力を入れているため、以前から種々のイベントを行ってきましたが、最近では活動に参加するメンバーが決まってしまい、その方々も体力的にきつくなっているという現状があります。そのため、次回9月13日の活動では、学生たちが各世帯を訪問し、事前に配布したアンケート用紙を基にインタビューを行い、活動に参加しない方々の理由や原因を調査します。さらに10月4日の越生町の体育祭では、学生たちが龍ヶ谷勢として参加予定。学生の力で「新しい風」を起こすことが目的です。

伊藤さんは「僕の代での活動は、まず基礎作り。色々と新しいことをするよりも、まずは龍ヶ谷にある資源を再発見・新発見し、資源の活かし直しに重点を置きたいと思います。これから活動を継続するにあたっては、地域の方々の信頼を得ることが最も重要。この事業の採択は4年間ですが、それ以降も学生が現地と関わることができればと考えています」と、龍ヶ谷への思いについて話しました。

学生たちが現地と繋がるための「マゴコロ宅急便」の成果が期待されます。

篤い志を持つプロジェクトメンバー（左から金子さん、田島さん、伊藤さん、古市助教、小林さん、中潟さん）

特集2　それぞれのオープンキャンパス

この夏、本郷・ふじみ野両キャンパスでは「オープンキャンパス」、駒込キャンパスでは「高校説明会」と「文京生体験」（中学）が行われ、本学・本校に興味をもつ多くの来校者で賑わいました。

8月1・2日　本郷キャンパス「オープンキャンパス」

学部カラーのTシャツ着用の学生・職員に迎えられた来校者は、仁愛ホールで工藤秀機学長から歓迎のメッセージを送られ、それぞれが目指す場所へ。

配布されたプログラムには、学部・学科ガイダンス、入試ガイダンス、推薦入試ポイント解説、小論文対策、外国語・経営学部AOセミナーなど、知りたい情報が満載！　8月2日の講義ライブでは、外国語学部志望者に向けて、ハンブルトン・アレクサンドラ助教による「異文化コミュニケーション思い込みとステレオタイプを超えて」。経営学部志望者には、絹川直良教授による「大きく変貌する電子決済」。臨床検査学科志望者には、眞野容子助教による「身の回りに潜む小悪魔たち」。看護学科志望者には、奥原秀盛教授による「緩和ケア概論～その人らしい生き方を支える看護」。GCTについては、サンドラ棚橋教授による「Culture and Business」。各講義、大盛況で来校者の関心の高さが伺えました。

体験型として、外国人スタッフと英会話を楽しむチャット・ラウンジ体験、血液型判定模擬採血もできる臨床検査実習体験ツアー、最新の設備で呼吸音・心音を測定する看護体験、さらにAnime Japan 2015に参加した学生たちによるプレゼンや対話を楽しむコーナーも好評でした。初日のみ、英語スピーチコンテストが行われ、外国語学部の迫力ある伝統行事が展開。文京コンテンツワード2015も開かれ、学生が制作したオリジナルコンテンツが発表されました。仁愛ホールでは、五街道ウォークの説明もありました。

学食&カフェ体験（無料）も大好評！　個人相談コーナー、キャリアセンターでの個別相談など心くばりの対応。キャンパスツアーでは、明るく元気な学生たちが学内を案内。グループでの来校者は、「学びたいと思えることがここで見つかった！　4年間遠慮なく学びたい！」「好きな英語の力を高めたい」と意欲的でした。

絹本桃子オープンキャンパス学生実行委員長（経営学部3年）は、「8月のオープンキャンパスではAOセミナーがあり、AO入試を受ける高校生は必ず参加しなければならないため、沢山の高校生が来校してくれました。次回は11月21（土）。最高に楽しいオープンキャンパスにします！」と意欲満々。

「先生と話そう！」コーナーで親身な対応

本郷オープンキャンパス実行委員会一同

大人気の看護実習体験

絹本学生実行委員長

「五街道ウォーク」の説明に興味津々

チャットルームにはスタッフが常時待機

8月1・2日　ふじみ野キャンパス「オープンキャンパス」

スクールバスで来校者が到着すると、学生・職員から歓迎の挨拶の嵐！　笑顔の来校者はそれぞれ目的の場所へ向かいました。

まずは、アトリウム特設ブース。人間学部の学び体験ゾーンでは、コミュニケーション社会学科、児童発達学科、人間福祉学科、心理学科の専門性の高い体験を実施。「新・文明の旅」プログラムブースでは、ラトビア、リトアニア、ポーランドを紹介。合格絵馬コーナーも人気がありました。

ステージでは、手話サークル「あしの会」、女子ラクロス部、ソングリーディング・ダンスチーム「U」、EOPARDS」、パネルシアターサークル「ピノキオ」が登場。ラクロス部では、来校者も参加して楽しいひとときを過ごしました。

推薦入試・AO入試ポイント解説、各種ガイダンスも来校者の関心が高く、教員や学生とのフリートーク、先輩の受験体験話などで盛り上がりました。各学科、教員によるホスターセッションもあり、熱いパレゼンが展開されました。

講義ライブは、初日に中山智晴コミュニケーション社会学科長・教授、小栗俊之児童発達学科教授・ふじみ野幼稚園園長、金子智栄子教授、笹岡眞弓人間福祉学科長・教授、鳥羽美香教授、永久ひさ子心理学科教授、村井潤一郎教授、2日目に福井勉保健医療技術学部長・教授、柿崎藤泰理学療法学科教授、長崎重信作業療法学科教授らスペシャリストが登壇。また、両日、埼玉県作業療法士会がブースを設置し、個別相談や講義ライブを実施しました。

8月1日には、環境教育研究センター主催の「まなびとあそびのキャンパス」（次号紹介）で6つのブースが設けられ、子どもたちが大学生と思う存分遊ぶ姿が見られました。

キャンパスツアーでは、ふじみ野キャンパスならではの、地域連携センターBICS、ふらっと文京、環境教育研究センター、介護実習室、発達心理学実験室、人体標本室、運動学実習室、運動療法実習室、日常動作訓練実習室など、両学部に欠かせない専門性の高い場所の案内に力を注ぎました。

埼玉県内からの来校者は、「将来、何か人のためになる仕事がしたい。先生も学生も親切で、ひとりでも安心して過ごせた」と笑顔で話しました。齋藤淳子インターンシップ学生実行委員長（心理学科3年）は「周りの委員から支えてもらっている有難さを改めて体感。そのお陰で、私を含めた幹部が機能できていると思います。次回11月のオープンキャンパスでも、次の世代ならではの内容が期待できますので、すでにいらしてくださった皆様の再度のご来校をお待ちしております！」とPR。

ふじみ野オープンキャンパス実行委員会一同

齋藤学生実行委員長

リアルな赤ちゃん人形を抱く人間学部の学生

「LEOPARDS」のパフォーマンスに釘付け

先生も積極的に学科説明

標本室担当の学生たち

8月2・29日　駒込キャンパス「高校説明会」

6月に続いて今年度2/3回目の「高校説明会」が、ジャシーホールで行われ、佐藤芳孝統括校長が挨拶。続いて、清水直樹高等部副校長が本校の特色と入試方法等の説明をしました。

内容は、①私立学校とは②授業の特色③その他の特色④進路指導⑤入試方法⑥立地・施設に分け、①では本校創立者・島田依史子先生の思いに触れ、「自立と共生」という教育理念について。②では、A「国際教養」B「理数キャリア」C「スポーツ科学」の3コースの特色とカリキュラムについて。Aでは、外務省、JICA、大使館などを訪問することや国際塾や海外研修旅行・語学研修など。Bでは、SSH独自カリキュラムでの学習、国内外大学・高校との連携教育など、Cでは、スポーツ活動と学習との両立を徹底的にサポートする体制、人間の身体と心をテーマに専門家から学ぶスポ学講座など。③では、本校は文部科学省から「SGH」と「SGHアソシエイト」の指定を受け、両方の指定は都内女子校では本校のみであることなど。④では、昨年度の進学状況について解説。⑤では単願と併願の推薦基準や入試方法など。⑥では、清潔な教室、充実した図書館などの紹介など。

説明会終了後は、本校生徒によるキャンパスツアーを実施。毎回、多くの在校生が積極的にボランティアとして関わり、明るく誠実な姿が来校者に大評判となっています。来校者からは「3コースの特徴がよくわかった」「校舎がきれいで感心した」などの感想が聞かれました。

佐藤統括校長の熱い挨拶

図書館を案内する高校生（右）

明るく誠実な生徒（右）のキャンパスツアー

8月30日　駒込キャンパス「文京生体験」（中学）

6月に続いて今年度2回目の「文京生体験」がジャシーホールで行われました。まず、この夏、海外語学研修に参加した4名の生徒が登壇。それぞれの貴重な体験について話しました。

コース別体験では、①グローバルスタディーズ②アドバンストサイエンス③スポーツサイエンスの3コースに分かれ、来校者はそれぞれ希望の授業を体験。①では、加藤碧教諭が「世界に詳しくなろう！アジア・アフリカを知る」をテーマに授業。②では、草薙美生教諭、蓮池一哉教諭、岩川暢澄教諭が、参加者に「身近な不思議を科学する！」をタイトルに実験指導。在学中に各研究に励み、校外での発表を積極的に行った初代SSHの卒業生たちがTAとして参加。③では、第三体育館で「正しい姿勢の大切さ」について、西山一貴教諭がサッカー部員をモデルにして実践を交えながら指導。

礼法体験では、茶道、華道、ペン習字を実体験。昼食時には、カフェテリアで給食体験も実施。個別相談では、熱心に教員に質問する来校者の姿がありました。在校生も案内や受付など心を込めて対応しました。来校者からは「授業がわかりやすかった」「グローバルというのは、英語だけではなく、色々な学科に関係することがわかった」との感想が聞かれました。

科学実験指導中の岩川教諭

海外研修での貴重な体験を発表

西山教諭による「スポーツサイエンス」

加藤教諭による「グローバルスタディーズ」

高校　SSH（スーパーサイエンスハイスクール）便り㉗

「さくらサイエンスプログラム」で国際交流

都内女子校で唯一、文部科学省からSSHの指定を受けている本校で8月20日、「さくらサイエンスハイスクールプログラム」が行われ、本校生徒がアジアの優秀な高校生と交流しました。

「ノーベル物理学賞」受賞・小林先生の講演（写真提供＝スタジオ・トナミ）

「さくらサイエンスプラン」（＝「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」／国立研究開発法人科学技術振興機構〔JST〕主催）は、産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めると共に、アジアと日本の科学技術の発展に貢献することを目指すプログラムです。その一環である「さくらサイエンスハイスクールプログラム」では、アジアの15カ国・地域から優秀な高校生を招聘し、日本の最先端の科学技術や優秀な科学者に接し、日本の高校生と交流できる機会を作っています。本校には、中国とベトナムの高校生約80名が来校し、本校生徒37名と科学交流を行いました。

第1部では、08年ノーベル物理学賞を受賞された小林誠先生がジャシーホールで講演。宇宙の起源を探る素粒子物理学の第一人者で、「CP対称性の破れの起源の発見」という当時の素粒子物理学では画期的な理論をうち立てた先生による英語での講演です。テーマは"Matter and Antimatter"（物質と反物質）。内容は難解でしたが、参加者全員が真剣に聞き入り、英語による質疑応答が繰り広げられました。

小林先生も参加のカフェテリアでの昼食会の後は、第2部「エッグ・ドロップ・コンテスト」を実施。まずは、BAL Studioで、生徒たちが3カ国混成の20グループに分かれ、卵を7メートルの高さから落としても割れないような装置をA3ケント紙とセロテープのみで作製。各グループ共、いかに衝撃を和らげるかを議論しながら、個性溢れる装置を完成させました。

この春の卒業生・神宮司惠麻さんとキャデラック麗美花（レベッカ）さんも抜群の英語力を活かし、TAとして活躍。在校生も、献身的に同プログラムを支えました。

さらに、ジャシーホールで、グループごとに装置の作製コンセプトのプレゼンテーションを実施。スクリーンに映し出された装置を見ながら、デザインの美しさや発想の素晴らしさなど、全員が投票を行いました。

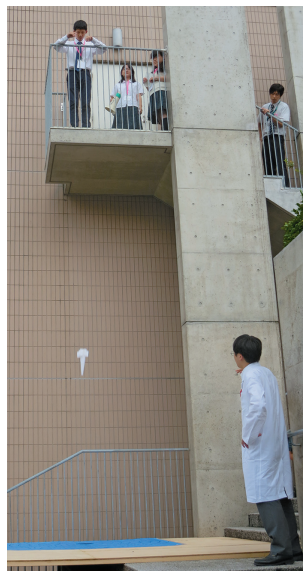
いよいよコンテストがスタート！　各グループの生徒代表が、校舎の3階非常階段から仮設ステージへ卵を入れた装置を投下。その様子を、ハイスピードカメラでジャシーホールに中継。投下会場やホールでは、ため息や歓声が溢れ、大いに盛り上がりました。中国の生徒は、「絶対成功させると思って装置を作ったけれど失敗。でも、とても楽しかった！」、ベトナムの生徒は「今日の経験の全てがエキサイティング！　今度は私の学校へ皆さんを招待できたらうれしい」と笑顔で話しました。

「卵が割れない装置」作製のため議論白熱！

表彰式では、投下に成功した5グループのうち、高得点順に1位から3位までと、特別賞（ビューティフルデザイン、イノベイティブデザイン）の全員に、佐藤芳孝統括校長より賞状と副賞が授与されました。副賞は、7千万年前の恐竜の卵の化石！　貴重な副賞を手にした生徒たちは、満面の笑みを浮かべました。

早朝から夕方まで苦楽を共にした生徒たちは、リラックスして打ち解け合い、有意義なプログラムとなりました。

佐藤校長（左）より表彰状授与


エッグドロップコンテストがスタート！

大学　アジア太平洋地域会議・助産師学術集会

看護学科の市川准教授が講演

「第11回ICMアジア太平洋地域会議・助産師学術集会」が7月20から22日、パシフィコ横浜で開かれ、本学看護学科の市川香織准教授が21日、「今、求められている産後ケア」をテーマとしたワークショップに登壇しました。

演者は、市川准教授はじめ、関東学院大学看護学部看護学科の坂梨薫教授、武蔵野大学附属産後ケアセンター桜新町の萩原玲子センター長。座長は、首都大学東京健康福祉学部看護学科の安達久美子教授と、日本赤十字社医療センターの井本寛子副看護部長。

講演内容は、フィンランドのネウボラ（妊娠、出産から子育てまで家族を支援し続ける育児支援サービス）の実例や、産後1カ月前後で、精神的不健康に陥る母親が約7割存在するという現実を踏まえ、母親としての自信や役割を習得するためのケアをいかに行うかなど。会場の出入口まで来場者が溢れ、同テーマへの関心の高さが伺われました。

会場から市川准教授に「どのような形で助産師が地域に入っていけるか」と質問があり、市川准教授は「妊婦健診も行えるフィンランドのネウボラは、助産師の資格を持つ者が担当。日本でも実際に助産師の強みを活かして、良い産後ケアを行っている施設がある。今後、助産師のキャリアパスのひとつとしてこのような形で産後に関わることがモデルになっていくと思う」と回答。

この国際会議には、37カ国から3200名を超える来場者がありました。

なお、市川准教授は8月11日にも「母子研修」（山口県健康づくりセンター主催）に講師として登壇。母子保健の最新の知識や技術を習得することを目的とした同研修で、「地域における妊娠・出産・産後の切れ目ない支援を強化するために～今求められる産前産後ケアとは～」をテーマに講演を行いました。

質問に答える市川准教授（右）

楽しい一日を共有した中国とベトナムの留学生80名と本校関係者（写真提供＝スタジオ・トナミ）

大学　「文京ミ・ラ・イ対話」

人間学部の古市助教が講演

「文京ミ・ラ・イ対話」（主催＝文京区）が7月5日、本郷キャンパスで開かれ、人間学部の古市太郎助教がゲストとして登壇。「文京区の未来を考える対話の場」としての同企画は、専門家や実践者、文京区職員を交えて、地域課題のテーマに関心のある方々が解決策を考える取り組みです。

古市助教は、これまで様々な問題を家庭・地域社会・親戚・近隣で自己完結していた社会関係が、塾・業者・ファミレス・行政に外部化（＝都市化）する社会関係になっていることを指摘。それを踏まえて「公助（義務教育）」のサービスから漏れ、「自助（自費による塾通いなど）」による自立が困難な子どもたちを、社協・行政、市民・学生ボランティア、町会・地元住民、民生委員などの内部化（＝地域協働への動き）によりサポートする一般社団法人てらまっちについて話しました。もうひとりのゲストスピーカーは、不忍ブックストリート代表の南陀楼綾繁（ナンダロウアヤシゲ）さん（写真右）。自身が主催する「一箱古本市」を例に、本を媒体として生まれたコミュニケーションについて話しました。

続いて、参加者が「してみたいこと」「仲間作りの課題」などを紙に書きとめ、グループ内で発表。それらを基に、古市助教と南陀楼さんによるシンポジウムを実施。司会は、株式会社エンパブリック代表取締役の広石拓司さん（写真左）。「一箱古本市」実行委員からの報告、てらまっちが石巻で行った傾聴ボランティアや千駄木地区の高齢者のための談話室など、地域で活躍中の参加者による報告もありました。

最後に参加者が「どんな交流の拠点が必要だろう」「仲間を広げるには」「地域で活動を続けるには」など6項目についてグループごとに活発な意見交換を行いました。

今後の「文京ミ・ラ・イ対話」は、9月24日（木）b-lab（文京区青少年プラザ）、10月4日（日）跡見学園女子大学で行われます。

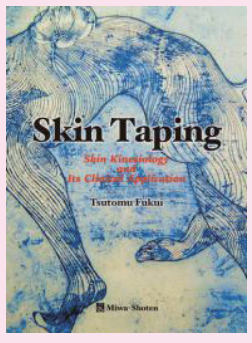
シンポジウムで語る古市助教（中央）

大学　保健医療技術学部

福井学部長が海外講演

福井勉保健医療技術学部学部長・教授が今年、皮膚テーピングに関する著書「Skin Taping Skin Kinesiology and Its Clinical Application」（三輪書店刊）を発刊。それがきっかけで、7月16日、ロンドンのBritish College of Osteopathic Medecineで講演を行いました。三次元運動解析システムを使用して研究された皮膚運動学に基づき、福井学部長が開発した新しいテーピング方法を実践方式で解説。

約100名の受講者からは「Amazing!」の声が何度も上がりました。



海外講演のきっかけとなった英語の著書